

水彩 Technique。



メディウム！

新しいテクニックが新しい作風を生み出す、ということが水彩の世界でも始まっている。絵具自体を自作することで、水彩のタッチを変えたり、色合いに変化をつけたり、にじみを調節したり、マスキングをしたり、白抜きをする。メディウムを使うことで表現が変わっていきます。ホルベインから本格的な水彩用メディウムが出ました。専門店で。

<ホルベイン水彩用メディウム シリーズ>オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVグロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

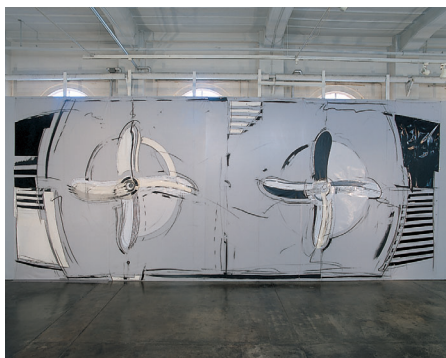
www.holbein-works.co.jp

holbein

吉澤美香



1982年、大学4年生の時に駒井画廊で初個展を開く。紙に描いた絵を切り抜いて壁に貼った。「せっかく美術学校に入ったんだし、もともと絵を描くことが好きだった」



無題 1987 ミクストメディア
356×820cm
いまはなき佐賀町エキジビットスペースでの個展から展示風景
写真=林雅之

横山勝彦 文 森田兼次 写真*

絵になる瞬間をとらえる無機質な素材

1987 「見に来てくれる人に応えられるようにしなければならぬとも、これで食べていくにはどうしたらいいかとも考えるようになった」

1959年、東京に生まれた吉澤美香は、少女時代は、父親の仕事の関係で海外生活をj験している。幼少時にはミャンマーに、8歳から15歳まではロサンゼルスに在住した、いわゆる帰国子女である。82年多摩美術大学油画科4年生の時、初めての個展を開催。紙に描いた絵を切り抜いて壁に貼ったものだった。その後、家具に絵を描いたり、日常のありふれたものを加工した作品を制作。すぐに何枚も貼り合わせた紙の上に描くドローイングへと、またビールを支持体とする作品へと展開した。最初はビールに直接描く作品じゃなくて、その上に紙を貼ったりしてました。(中略)それからビールに描くようになって、これになんかを使って描くかということが大問題になったんです。(本誌87年12月号)。手本とする人はいなかったから、耐久性のある描画材料を求めて、メーカーに問い合わせたり、電話帳で問屋さんを探したりとかした。もともとビールのつるつとした質感が好き



1990年、コパヤシ画廊・企画室での個展から
 (右から)Xは-11)《は-10)《は-9) 写真=未正真礼生

1990 「作品ができあがった時点で、それまでの過程が見えないというのは、なんか足りないような気がするのです」

だった。同が、ビートルを使用することで巨大な作品を制作することが可能になった。88年からポリプロピレンの樹脂板に工業用のPPインクポリプロピレン専用インクで描きはじめる。素材から見れば各種の樹脂板上に大胆な形態を描く吉澤美香のスタイルは、この頃決定したとみることができる。その後、アクリルや、現在好んで使用するユボ紙など支持体や描画材料を変えながらも、一貫して大胆なフォルムを展開する作風は基本的には変化していない。とすれば87〜88年は、吉澤美香にとって大きな意味をもつだろう。少なくともアーティストとしての大きな転換点となったのではないだろうか。20歳代後半の時期である。

吉澤は、82年に多摩美術大学の大学院に進学するが、第18回今日の作家展 November Steps (横浜市

民キヤラー)に、またその翌年には「第3回ハラ・アノアル」(原美術館)にまた大学院修了時の84年には、第2回富山国際現代美術展 Toyama Now (富山県立近代美術館)に選出され

る。25歳にして美術館主催の各種企画展に出品するという大きなチャンスに恵まれたのだが、本人としては、「なんで選ばれたのかなと不思議だった」という。各種グループ展で一番若いメンバーとして選出されながらも、30歳近くまでフラフラしていたという彼女ではあったが、85年にはサンパウロ・ビエンナーレに、また87年にはドクメンタ に日本代表の一員として選出されるなど、海外での展覧会のチャンスにも恵まれた。

また同年、大空間の佐賀町エキジビツトスペースで個展を開催した。「その頃から、これでちゃんとやっていかなれないなと思った」という。かながんばうたなとも思う「が、すごく忙しかつたんで、20代終わり頃、反省もした」と語る彼女は、この頃から、見に来てくれる人に応えられるようにしなければと感じるとともに、仕事としてやっていくには、これで食べていくにはどうしたらいいかをキチンと考えるようになったという。もともと自力で生活しようと考えていたが、現代美術の世界



上 個展「吉澤美香の部屋」(1997年、いわき市立美術館)の展示風景
 下 を-55 2004 合成紙にガッシュ、アクリル絵具 109×158cm
 ギャラリー・アート・デュンでの個展から 写真=寺田篤正

1997

「いまはまだ助走をやっているような感じで、ほんとうのスタートラインには立っていない」

は当時まったくポランテアみたいだった状況の中で、画廊とも各種条件を詰めた契約書を取り交わすようになった。今では普通のことになっているが、当時としては異例だったろう。注目を浴びていたとはいえ30歳の若手女性作家である。嫉妬を含めてかなり生意気に思われたのではないだろうか。「陰でそう思っている人はいっぱいいたかもしれないけれど」と、彼女はさりげなく微笑む。

いずれにしても87年から88年、30歳を迎える時期に吉澤は、表現の手法を含めてアーティストとしての自分を明快に自覚したようだ。それは表現手段を獲得することから、現代に生きる一人の表現者としての環境整備といった各種の問題に対しても、見事なまでのプロ意識を持つに至ったように思われる。しかし彼女の姿勢をみていくと、肩に力を入れて力むわけでもなく、じつに自然に身を処しているようだ。もともと小柄な彼女は、強烈に自己を主張するといった風ではなく、街角の風景にもすんなり馴染んでいる。



吉澤は、学生時代からチャンスに恵まれ、順調にアーティストとして歩んできたようにみえる。しかし、油画科に入りながら、最初の個展からキャンバスに油彩という形式を選んではいない。それは、「絵画は死んだ」といわれた当時の環境の中では当然の選択だったのかもしれないが、80年代初頭は、まわりの美術状況は、もの派とがコンセプトチュアルアートとかで、絵を描いているのは格好悪いという感じだった」時期であ



3月12日まで、ギャラリーGANで開催された個展会場にて。後ろの作品は新作の《わ-21》。窓からの外光に照らされた白い壁の明るい作品は、作家とともに静かに呼吸していた【*】

よしざわ・みか 1959年東京都生まれ。84年多摩美術大学大学院美術研究科修了。82年「第18回今日の作家展 November Steps」（横浜市民ギャラリー）、83年「第3回ハラ・アニュアル」（原美術館、東京）、85年「第18回サンパウロ・ビエンナーレ（ブラジル）87年「ドクメンタ」（ドイツ）、95年「Art in Japan Today 日本の現代美術1985-1995」（東京都現代美術館）2003年「ART TODAY」（セゾン現代美術館、軽井沢）などに参加。個展に82、84年駒井画廊（東京）、87年佐賀町エキジビットスペース（東京）、90、91、93、94年ギャラリー・ホワイトアート（東京）、91-94、96、2000、03-05年双ギャラリー（東京）、92、95、98、01、04年ギャラリー・アート・デュン（浜松）、97年「吉澤美香の部屋」（いわき市立美術館、福島）2000年「吉澤美香 余白への眼差し」（セゾン・アートプログラムギャラリー、東京）、05年「作家の現在」（いわき市立美術館）ほか。著書に『園外遊歩』（岩波書店、2001年）がある。ブログ <http://sanagi.cocolog-nifty.com/lucky/>

ある物を描くのではなくて、その物があることによつてできる形」である。すでに20年を超えるキャリアと十分な実績があるが、いまの自分は「まだスタートラインに立っていないような気がする」とも感じつつも、きた。このような、すべてを受け入れながらも冷静で、さりげなく自分を保つているような感性は、何に由来するのだろうか。「転校が多かったので、友だちとか、仲良くなつてもすぐ別れることになつたり」という子ども時代から自然に養われたのかも知れない。「状況が変われば、また自分も変わる」といふような訓練はあつたかも知れない」と語る彼女は、また、絶対的な壁は無いんだな」とも思っているようだ。クールにいまの自分に付き合ひながら、彼女は、いまも、さまざまな形が「絵になる瞬間」をとらえようとしているようにみえる。

よこやま・かつひこ
「練馬区立美術館主任学芸員」

2月10日、個展開催中のギャラリーGAN（東京・表参道）にて取材

る。そのような中で、彼女は、「もともと描くことが好きだから描き続けていたのである。ただ、制作するのに多くの手順を必要とする油彩技法には馴染めず、大学1年生くらいまでしかキャンパスに描く油絵は描いてなかつた」という。自分では描かないが、油彩画を描くことを否定しているわけではない。いろいろな素材を試してみても、それから油彩画を選ぶのではなくて、はじめから油

彩だけというのは「違うのではないかと吉澤は感じているようだ。自分の体質と表現に沿つた、つまり、すぐ形にしたい」とし、描き直したりとかもすぐできる「素材であり、ニューtralで、無表情な」化学製品の支持体と絵具を選んだにすぎないのだ。「プロセスが単純なほどいい」という彼女は、版画をあまり作らないが、それは、結果がすぐに見られないし、摺り師などとの共同作業に

向いていない」からにはほかならない。吉澤にとつて、描画材料や支持体はまさに自分の感性を即座に具体化するために選ばれたものである。彼女が描くのは、形の発生学とでもいうほかない多様な形である。「ただの線になるか、形になるかのギリギリのところ」を、また、まったく平面なんだけれど、ちよつと手を入れれば立体的に見えるような形。また、たとえは何かの隙間の形だったり、